

「草本植物の全体像」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

顕花植物(花が咲く植物)は、大きく分けて、木本(もくほん)と草本(そうほん)がある。いわゆる「木」と「草」である。子どもたちの目線で見れば、観察対象としては、圧倒的に草本のほうが多いと言える。子どもたちが、その草花を観察している様子を見ると、植物の体のごく一部しか見ていないことが多い。

例えば、ヘビイチゴの観察では、多くの子どもは、目立つ実にはばかり目がゆく。それはそれで大切なことで、植物の一部分を詳しく見る・・・という体験も絶対に必要なのだ。ヘビイチゴの場合、観察している子どもが、「実の中はどうなっているんだろう?」と知りたくなるのは当然のことで、それが好奇心、探究心の現れでもある。教師は、よく切れるカミソリを用意して、全員のヘビイチゴを切ってあげると良い。実がスカスカなわけや、一粒ひと粒の種(実は「瘦果」という果実の一形態)に、水や養分の通り道がつながっていることに気づくだろう。

しかし一方で、植物の全体像というのものにも、子どもの目を向けさせたい。ヘビイチゴは個体ごとに独立して群生するので、一個体の全体像を観察しやすい。試みに、個体丸ごとスキャナーに載せて、高解像度の写真を撮ってみた。画像を拡大すると部分部分の特徴が非常によくわかる。「デジタル版の窄葉標本」と言えるだろう。

